

NO.192

全 日 仏

11 / 48



全日仏婦20回記念大会 あいさつされる大谷智子会長
—10月18日・品川のパシフィックホテルで

インド日本寺落慶

12月1日—16日、慶讃法要

16法要団800余名が渡印

国際仏教興隆協会（巖谷勝雄理事長）が、各宗派・諸団体の協力のもと、釈尊成道の聖地、インド・ブダガヤに建設中であったインド日本寺の本堂がこのほど竣工し、来る十二月一日に入仏式、十二月八日に落慶式が執り行われる。その間十六日まで連日、現地で落成慶讃法要が盛大に厳修される。

この落慶法要のため、各種団体がそれぞれ法要仏跡巡拝団を組織し、法要期間の一日を受け持って修することになっている。

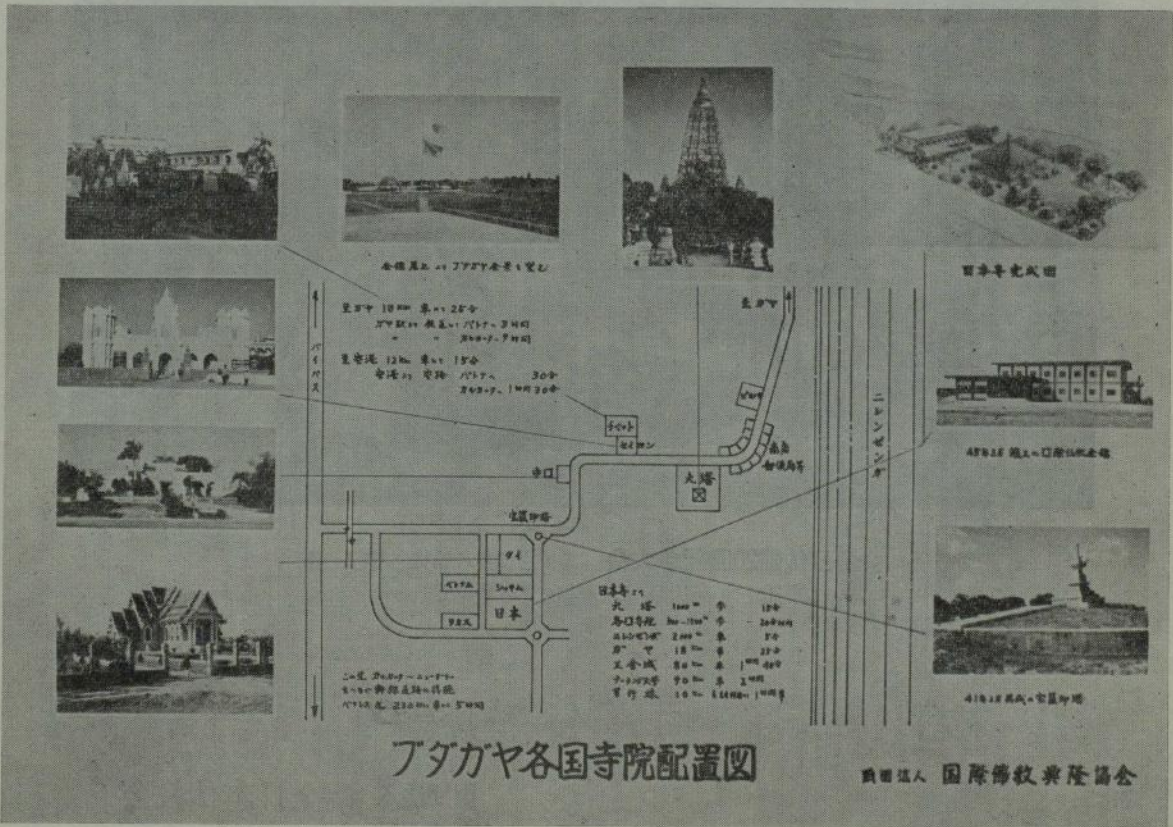
式典はいずれも、来賓並びに在印各国寺院代表及び現地住民多数を迎え、大塔にて読経後、大菩提会前広場よりお練り供養にて本堂前に至り、開堂式（テープカット）、本堂内における法要、正面階段にて記念撮影、さらに施食供養をしたあと会館に戻り、小憩後、祝賀会を催して終了することになっている。

とくに十二月八日の落慶式は、全日本仏教会の担当で、佐藤泰舜会長（永平寺

貫首）大導師のもと曹洞宗法要団を含めた二百数十名にのぼる法要団員が参列、インド国ギリ―大統領をはじめ来賓多数列席のもと盛儀が営まれる。

ブダガヤには、すでにタイ、ビルマ、チベット、スリランカ、中国の寺院が建立されており、日本寺は六番目の寺院である。なお、ラオス、ベトナム、シッキムも用地を取得し、寺院を建設しようとしている。

これは、インド・ビハール州政府が、釈尊成道の地であるブダガヤを仏教の聖地として、世界各国からの参拝者を集めるべく、「国際仏教センター」としての都市づくりを進めているもので、国際仏教興隆協会では、インド政府の厚意により、土地約六千坪の貸与を受け、昭和四十三年より建設に着手し、昭和四十五年一月には「国際仏教会館」を完成している。ひきつづき「本堂」の建設に着手し、以来三年、いよいよ十二月の慶事を迎えるに至ったわけである。



日本寺落慶法要日程並びに担当法要団一覽

法要月日	時	式典	担当宗派(団体)	導師	法要団出発日時	法要団帰国日時	団長	人数
12月16日	〃	〃	日本山妙法寺(インド)	栗本俊道師	12月10日・15時00分羽田発	12月20日・21時30分羽田着	栗本俊道師	30名
12月15日	〃	〃	東京都仏教連合会	古屋道雄師	12月10日・12時45分羽田発	12月21日・22時40分羽田着	古屋道雄師	30名
12月14日	〃	〃	立正佼成会	権田光正師	12月2日・12時45分羽田発	12月15日・22時40分羽田着	権田光正師	35名
12月13日	〃	〃	天台宗	杉谷義周師	12月8日・12時45分羽田発	12月21日・22時40分羽田着	杉谷義周師	25名
12月12日	〃	〃	日蓮宗	片山日幹師	12月8日・12時45分羽田発	12月28日・13時55分羽田着	片山日幹師	40名
12月11日	〃	〃	真言宗豊山派	鳥居敬誓師	11月29日・12時45分羽田発	12月12日・22時40分羽田着	浅井堅教師	40名
12月10日	午前9時	落成慶讃法要	奈良隣山会	大野可円師	11月27日・12時45分伊丹発	12月13日・21時15分伊丹着	大野可円師	35名
12月9日	午後1時	落成式	全日本仏教会	佐藤泰舜師	12月3日・12時30分羽田発	12月16日・22時40分羽田着	藤井寛心師	50名
12月8日	〃	〃	浄土宗	稲岡覚順師	12月1日・12時30分羽田発	12月19日・22時40分羽田着	麻布照海師	50名
12月7日	〃	〃	臨濟宗妙心寺派	狭間定義師	11月15日・10時00分羽田発	12月9日・22時40分羽田着	狭間定義師	50名
12月6日	〃	〃	真宗仏光寺派	渋谷有教師	12月1日・12時30分羽田発	12月28日・19時55分伊丹着	渋谷有教師	30名
12月5日	〃	〃	高野山真言宗	久利隆徳師	12月1日・12時30分羽田発	12月19日・18時55分羽田着	久利隆徳師	50名
12月4日	〃	〃	全日本仏教婦人連盟	一条智光師	11月25日・12時30分羽田発	12月8日・22時40分羽田着	山本スズ氏	35名
12月3日	〃	〃	国際仏教興隆協会	秋山祐雅師	(A)11月23日・12時35分羽田発 (B)11月24日・17時00分羽田発	12月5日・22時40分羽田着 12月7日・21時25分羽田着	田中隆恵師	50名
12月2日	〃	落成慶讃法要	真言宗智山派	巖谷勝雄師	11月26日・12時30分羽田発	12月11日・21時30分羽田着	福永龍雲師	50名
12月1日	午前9時	開山・入仏式	〃	〃	〃	〃	〃	〃

「会館」は、和風を加味した洋風鉄筋コンクリート造二階建、延三百五十三坪のもので、宿泊施設として洋室、床の間付和室ともにバストイレ付きで七十五名収容、一階には会議室兼食堂、厨房等が完備し参拝客の便に供するとともに、仏教資料室、研究室、診療室等の設備をそなえている。

「本堂」は、十一間角の和風方形鉄筋コンクリート造り、屋根はビトリウムタイル張り、高さ十間余の棟には金箔押の宝珠をいただき、軒裏組物を有し、二重基壇の上に建立された純日本式本堂である。

内陣正面には御本尊、その左右に各宗祖像を安置し、外陣は通常三百席を設置、

また五百名の会議場としても使用できるものである。

法要団もこれまで慶事のたびに繰り出してきたが、今回の落慶式には、それをはるかに上回る十六団体、約八百名余の僧侶、仏教徒が渡印、法要を厳修するわけ、その盛儀は全仏教徒のよろこびであり、とりわけ永年苦労されてきた巖谷

理事長はじめ関係者には一段と大きな感激であらう。

同協会では、さらに第三次事業として保育所、医療所、農業技術研究所等の開設を予定しており、その意味でも今回の盛儀は、現地住民にも印象深い仏縁を結ぶことが期待される。

昭和48年11月1日

起源についての見解

真 溪 義 貫

「生命科学と仏教」シンポジウムを終わって



「生命科学と仏教」のシンポジウム一、二、三回を終えて反省や思いを残すことは数多い。しばしば言うように「生命」は定義することが甚だむづかしいものであり、その抽象母体が異なることによつてそこから引き出されて来る概念もまたそれぞれ異なつて来る筈である。従来仏教の生命観もやはり真、善、美などと同様、形而上的な概念を主とするもので、科学の対象としている生物の属性としての生命とは可成異っている。従つて生物の老化、死についての概念も全く違つたものというよりは、限界の異なる発想である。にもかかわらず生命がいずれの立場からしても、まことに尊厳なものであるという点において一致している。だからこそ吾々は生命をあらゆる立場から究明し、熟視することが肝要であるこ

とには間違ひはない。この企画を採用した理由もここにあったと言えるのである。生命科学を学習することによつて、吾々は生命現象が多元的な諸要素の相互関係によつて成立することを知った。仏教はこの諸要素が独立して存在すること否定し、相互関係によつてのみ存在するものであるが故に諸要素そのものも実在しない。ただ「空」のみが存在するとしている。このような仏教の絶対的現象論から絶対的虚無論を展開する思考は、必ずしも科学（現代物理学）が究明しつづける宇宙像と異つてはいない。否、寧ろ驚くほど相似する概念でさえあるといえる。ただここで肝要なことは、そうであるればこそ仏教の概念的な概念に科学的知見や実験を摂取することが新しい時代への仏教的展開でなければならぬということである。従来の哲学や宗教が、生命・生と死、そして未来観に答えて来た解答は今や首を立てて崩れ去ろうとしているし、科学の世界においてすら「生命」に対する母体が時代と共に振りつつあることを考えると、仏教の生命観が従来のままで通用する筈はない。果してこのシンポジウムが新しい仏教の生命観のために役立つことが出来たかどうか、これは今後待つ以外はない。また一方、仏教

的思考が他の生物と区別される人間の特にその精神活動の解明に益することがあったかどうかと同様である。

只、この意味で甚だ残念だったのは、生命科学からする生命現象のABCはある程度学習し得たが、生命の起源に関する解明を欠いたことである。この点キリスト教は、超自然的なものとして、即ち神様の創造したものとはっきり割り切っているが、仏教はこれをどう見るのか。科学者側の説明もさることながら、仏教側からの問題提起を欠いたことは残念である。従来この問題に対して大別すると三つの考え方がありようである。第一は神様の創造したものとするもの。第二は地球外の宇宙から生命の種子が地球に降つて来たとするもの。第三は、原始地球上の無機物から次々と生物に必要な有機化合物が自然界で作られていつて発生したと考えることである。仏教では一体、この中のどれを採っているのだろうか。

人身受け難し、今既にこれを受く。このことはやはり諸処因縁と解するとき、生命の起源も亦、諸処因縁と解するならば、どうも第三の考え方の範疇に入りそうである。といつてもこれは余りにも飛躍的な論理だとの非難は免れないが、このことは後で進化論を取り扱う際触れることとする。

ともあれ第一の生命は神の創造であるとする考え方は、今や科学的知覚の批判に耐えられるものではないので問題外としても、第二の宇宙のどこからか種子が

飛んで来たとする説、例えばアレニウムの宇宙胚子説は、今でも隕石の分析によつて生命に必要な有機分が含有していたという証明で、これを裏付けようとする学説も絶えない。しかし仮りに、他の天体に生命が存在するとしても依然生命の起源そのものの解明にはならない。最後の原始地球の地表に存在した物質の相互反応の末に、遂にある日ある時ある場所

で生命が発生したとする議論は、原始地球の地表と同じ条件を想像して色々な実験を行うことによつて生命の起源を解明することが考えられる。ところが地球が誕生してから四十五億年といわれるが、この間に起つた化学変化を順を追つて実験することは全く不可能である。何故なら地球の歴史は数十億年も続いているのに、人間の歴史は僅かに百万年にしか過ぎないからである。

しかしここで一つ可能なことは、人間による想像力である。即ち四十五億年前の原始地球の大気の化学組成を色々な計算ではじき出すと、窒素と二酸化炭素を主成分とし、水蒸気、メタン、アンモニア、リン化水素と少量の水素であったと想定する。そして一九五五年アメリカのミラーは水素、アンモニア、メタンと水蒸気を含む気体中で放電を続ける実験を行った。その結果、数多くの有機化合物の生じることを発見した。最も多量に生じたのは、生命体が一番必要なアミノ酸だった。地球が安定した形となつた二十億年昔の大気組成が、ミラーの実験に

用いた種類のものであったとすれば、このような化学反応が生じて各種の有機物が、海や池に流れて溜ったと想像されるのである。なおこのミラーの実験に刺激され、核酸の成分の一つであるピリミジンを生じた実験も行われていることはよく知られている。

日本でも阪大の今堀教授は数年前から実験をスタートし昭和四十六年末その結果を発表した。それによれば、ミラーの実験は、生成物質を一週間放置したため反応が盛んに進んで最終的安定物質としてアミノ酸をはじめとする有機物質を得たのであるが、最初に出来た不安定物質は何であって、しかも時間と共にどのように変化を辿るかをみるのができなかったのに対し、今堀教授の実験によって最初の不安定物質は炭素の三重結合を骨格とする青酸であることが判明、更にこの物質から大分子だけを取り出すと、残った物質はジシアンジアמידと称する物質であったという。この物質はアミノ酸を結合させて蛋白質を作る反応を促進させる能力を持っているといわれている。この発見は生命の起源を探るのに極めて重要な価値を有している。

いずれにしてもミラー実験を活用して色々な工夫をこらすと、生命に必要な素材であるアミノ酸、更に核酸にまでなるプリン、ピリミジンなどを生じたことは生命発生の第一歩を掴んだといえる。ともかくも四十五億年前に出来上がった地球に、十億年の歳月をかけて大陸が形成さ

れ、この大陸上の諸条件下で、生命に必要な有機物質が次々と無機物から生じたことは疑うことは出来ない。

このようにして、生物体を形成するための素材が揃って来たとき、それでは一体どうして生命の誕生の道を歩むのであるのか。一九三〇年頃、英国の生物学者ホールデンは、水際の湿った土に蛋白質や酸などが集まって生命らしいものが生まれたと主張した。また一九五〇年頃、有名な結晶学者ベナール(英国)は、その土は単なる土ではなく粘土であると言ふ。粘土は微粒の鉱物結晶であり、表面はカリウムイオンが多く吸着されている。

このことは、生物の細胞中にカリウムが集積されていることが裏付であるとする。また同じく英国の生物学者プリングルは生命は海底で生まれたと説明したが、これは原始地球の酸素を前提とした説であったため現在は支持を失っている。

またロシアの生化学者オパーリンは一九二四年に、太古の海中に生じたコアセルベートが生命の始まりであると提唱、さらにベナールは、池の中で一方から流れこむ物質が順次化学変化を受けつつ他方に流れ、これに次々と別の反応が側面から関与することによって最後には反応の相互の連絡が一つの環を形成して自己調節の作用を持つようになる。つまりこのような反応の列を作るためにはコアセルベートよりも広さを必要とするため、池のようなものが適当だと主張しているが、オパーリンのコアセルベート説、バ

ナールの池中での流れによる反応は、最近の科学者によってかなり強く支持されているようである。もちろん生命の起源については諸説入り乱れていて、決定的なものがあるわけではないことは、さきのべたように四十五億年という地球の歴史をそのままに実験できないからである。ただ諸説についてシンポジウム最終回の講師野田教授の見解を紹介して読者の参考に資することとする。

野田教授は「生命の発生は次のような段階に分けられると思う。すなわち(一)単純な有機化合物、たとえば大気や海の中のコアセル(または二酸化炭素)、アンモニア、水を原料とし、紫外線、放電によってアミノ酸、糖が作られ、海や池に留る。(二)海や池で有機物が、日光の紫外線をエネルギー源として周囲の有機物を取り込み、生物体の材料としての化合物を作る反応が生じる。すなわち簡単な化合物、重合体も作られ、タンパク質、核酸、多糖類などが生ずる。しかも、これらの反応相互間に有機的連関が生ずる。(三)相互関係にある一連の反応が空間的に纏って、外界との区分を作る。空間的に限定された区域を占める場合、個数で数えられる一つの個体、さらにこれが分裂による増殖も可能となる。而してこの個体は周囲から取入れた物質を分解してエネルギーを獲得する発酵の如き現象も出現することが考えられる。

例生きているに必要な化学反応が種々の部分によって受け持たれて来るようになる

れば、核タンパク質も生じ、その分裂によって遺伝現象も現われて来るであろうし、太陽の光を媒介として二酸化炭素から糖類を作る光合成が行われることになれば、大気に酸素が集積し、呼吸形成の生物ができるというわけである。また核酸が蛋白質の行動を指導していたと考えられる場合、核酸と蛋白質の複合体が染色体の先祖としての行動を始めると言えるであろう。

(四)第四の段階では原始的な細胞ができると見るべきであるが、この細胞が完全なものとなり、器官も揃って来ると、植物細胞と動物細胞に分かれるにしても、細胞は集合して多細胞生物を作り、これらはそれぞれの任務に従って分化するのである。ここまですべてが約二十億年前に完成したと想像されている。

以上が野田教授ほか、現代の分子生物学者の大体一致した見解である。さてここで問題は、このように生物が生じるために必要な物質が原始の地球上で合成され、細胞の形をとって生きるようになるまでの経過は、まだまだミッシングリンクがあるにしても一応解明された。しかしこのような化学反応が自然界で展開される必然性とは何かということになればただそうなのだけであるということでは、生命とは何かを語るための一定の限界内の問題に止まざるを得ない。ここに吾々は仏教や哲学が参画して哲学的基礎を見出したいのである。これもこのシンポジウムの目的の一つであった。

参院選

全仏の推薦候補

加盟団体の申請受付

明年六月に予定されている第十回参院議員選挙施行にあたり、全日本仏教会では本会推薦候補を決め、公選法に基づき支援を強力に推し進めるため、加盟諸団体に推薦方申出の受け付けを始めた。

○本会加盟の宗派・県仏・各種団体で支持する僧侶、仏教外獲者、もしくはその可能性ある立候補予定者に対し、機関決定のうえ、推薦状を交付する。

○所定の申請用紙(全仏にある)に諸項記載のうえ、写真一葉を添付して申請する。

○第一次締切日 昭和48年11月7日
第二次締切日 昭和48年12月31日

○推薦の決定は本会に一任、通知は申請団体及び立候補予定本人にそれぞれ通知し、適当な時期に本誌上に発表し、支援協力と呼びかける。

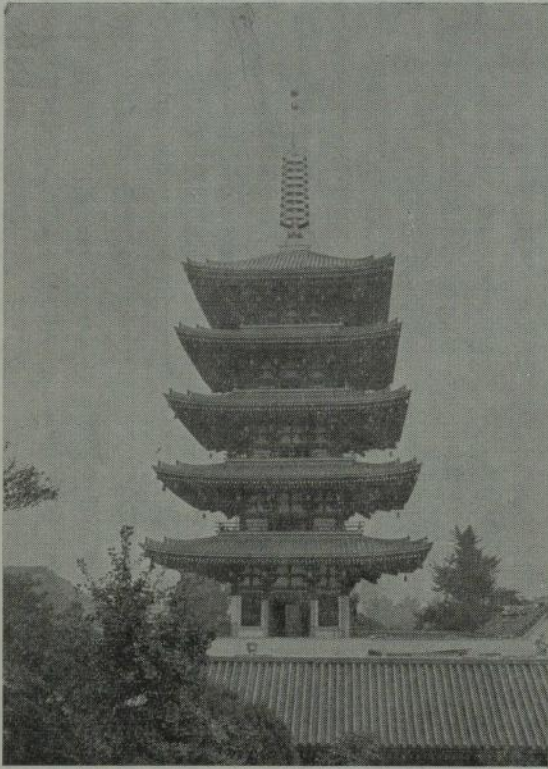
至るまで完成記念大法要が続けられる。

浅草寺の五重塔が完成

セイロンから仏舍利を奉安
にぎやかに記念大法要

戦災により焼失した浅草寺の五重塔の再建工事がこのほど完了し、二十八年ぶりに、その美しい偉容を下町浅草に再現した。

浅草寺では、この好因縁を迎え、十一月二日(金)午後二時より、スリランカ国イスラムニヤ寺院から拝受の仏舍利を五重塔に奉安する法要を営み、十五日に



でき上がった浅草寺の五重塔

落慶法要は、一日一仏舍利遷座法要(夜)

(儀) 万灯供養、二日一仏舍利奉安法要

(開白) 百体観音開眼法要、霊牌安置供

養、六日一あかの井奉納式、七日一誕生

仏奉納式、お茶湯功德日、八日一世界平

和祈願法要、お稚児練り供養、十五日一

関係役員物故者慰霊法要(結願) お稚児

練供養、お献茶、三日一十二日一寄進者

参拝日(永代供養) となっている。

慶讃行事として、秋田竿灯供養(一日)

白鷺の舞奉演(三日) 金龍の舞奉演、奉

讃時代パレード、おいらん道中ショー(以

上四日) ほか連日のように歓びの歌や茶

茶会等の催しが賑やかに繰りひろげられ

池上本門寺大会の県仏代表者会議

において、全仏誌を県仏・宗派・各種

団体等の情報交換の場として内容充

実するよう議決されました。

事務総局としても、より良い実のある

機関紙づくりに全力をあげております

ますが、限られた人員、予算をもって

しては取材等も思うにまかせないのが

現状です。

皆さんの

寄稿歓迎

短信でもどうぞ

この点をご賢察いただき、貴宗(県仏・団体)での活動情況一仏教徒大会、講習会、海外親善使節団派遣、その他の催し、あるいは問題提起、随筆等を御寄稿もしくはお知らせ下さいますようお願い申し上げます。各号、前月の二十日が原稿締切になっておりますので、各位のご協力を重ねてお願い致します。

機関紙「全仏」担当——国際文化局

全日本仏教婦人連盟

第二十回記念大会

去る十月十八日、全日本仏教婦人連盟第二十回記念大会が東京品川のバシフィックホテルにおいて開催された。全日本仏教婦人連盟は、昭和二十九年の第二回全日本仏教徒会議永平寺大会において結成され、以来着実な歩みを続け、ここに第二十回を迎えることとなったものである。会場には大谷智子会長、岡野貴美子副会長、山本スギ理事長をはじめとして来賓、会員、百名余が参集し、なかなかの盛会であった。

大会はまず三帰依文の唱和にはじまり全日仏婦結成二十年を記念しての法要がとり行われた。引き続き北川教全師導師のもと、全日仏婦の発展に力があった諸先徳、会員の物故者の追悼法要が厳修され、おごそかな経緯のもと、遺族の方々が献華し、故人の冥福を祈った。

この後、大谷智子会長、岡野貴美子副会長の御法話があり、大谷会長は「現代社会の現状を見るにつけ、仏の慈悲に照らされ御教を仰いでゆける身の幸を感じ宗派をこえて手をとりあって生きてゆきたい。この二十年を区切りに、全日仏婦が更に強く団結し、発展していくことを祈ります」と述べられ、岡野副会長も、「混迷する現代社会の中であって、仏婦

の役割は非常に大きいものがある。菩薩行の実践を通して世のために尽してほしい」とそれぞれ仏婦に励ましの言葉をおくられた。続いて山本理事長が挨拶にたち、全日仏婦結成の経緯等について述べ、現代の仏婦のあり方を更に真剣に問い直し、仏教婦人としての生活の実践に励みたいと力強く結んだ。

第二部の午餐会は、鱒淵全仏総務局長の音頭により、全日仏婦結成二十年を祝い、更には今後の発展を祈って全員で乾杯。続いて、来賓の方々の祝辞、孝道山において開催された第十九回全国大会の記録映画の上映、この度のインド日本寺落慶法要に参加される会員の紹介等が行われ、和気愛々の雰囲気うちに午後三時半、散会した。

教誨師 表彰

財団法人全国教誨師連盟（総裁大谷光照殿下）主催、法務省協賛による第八回教誨事業指導者養成訓練が、十月十一日から十三日まで行われたが、最終日に法務省において、永年教誨事業に功績のあった人々に感謝状が贈呈された。

仏教関係者は次のとおり。（敬称略）
法務大臣感謝状

- 小峰順善（真言宗智山派）坂野康顕（浄土宗）清田田昭（真宗本願寺派）光山善雄（真宗本願寺派）伊藤友情（日蓮宗）高橋瞻勇（西山禅林寺派）木下孝瑞（浄土宗）谷川義昭（真宗本願寺派）西崎憲雄（真宗本願寺派）佐久間尚孝（曹洞宗）

全国更正保護大会

仏教関係者大臣表彰受ける

第二十二回全国更正保護大会が、十月二十四、五日、広島市で開かれたが、式典において功労者の表彰が行われ、仏教関係者も多数表彰された。

判明せる受表彰者は次の各氏（敬称略）
法務大臣表彰

- 村上博了、由木義紹、山口俊定、貴田徹善、本田行晴、竹尾真善、山崎博栄（以上浄土宗）小野嶋元雄、勝田宗雄高柳亮然、堂谷哲雄、鎌田憲栄、萩原善修、那須徹兼（以上浄土真宗本願寺派）加藤量晃（真言宗豊山派）長与昌憲（真言宗智山派）山崎信隆（曹洞宗）室矢日芳（日蓮宗）

事務総局人事

樹谷淳宣（総務局財務主事）
昭和48年9月30日付退職

お寺に仏旗をかかげよう

大 大 150C—よこ 247C ￥4,500円 小 70C—100C ￥1,500円
中 90C— 135C ￥3,000円 手旗 35C—50C ￥800円

別染製 堅牢（全日本仏教会制定意匠登録済）

各地区仏教会でまとめて御注文の際は価格の御相談に応じます。

財団法人 全日本仏教会

111 東京都台東区西浅草1-5-5

電話03・843・6341~3

全仏輪袈裟

こげ茶、法輪マーク付き
¥一、二〇〇円

「全仏二十年のあゆみ」

前史や年表、加盟
団体名簿など収録

全仏が発足以来、数えの二十年を迎えたのを記念して、各種の行事を執り行ない、決意を新たに目的の達成に邁進しようということで、過去二十年の足跡を顧みて記録にとどめることになったのが、この「全仏二十年のあゆみ」と題する小誌である。

内容は、全仏前史、年表（昭和二十八

年～昭和四十八年）、全日本仏教徒会議

（第一回～第二十一回）の記録、世界仏教徒会議（第一回～第十回）の記録、歴代役員名簿、座談会「全仏二十年のあゆみ」（出席者―友松田崎、山本スギ、栗本俊道、河和田唯賢、真溪義貫、麻布照海）、全仏の思い出（十三氏寄稿）、付録として加盟団体名簿、役員名簿を載せている。

B五版、九十六頁のもので、希望者には実費六百円で頒布している。照会は今仏組織局あてに願います。

昭和四十九年版

仏教徒手帳

申込み受付中

全仏総務局では、毎年御好評をいただいております仏教徒必携「全仏手帳」を左記要領にて発行致します。部数に限りがございますので、御注文はお早めにお願致します。

内容 三冊依文、四弘誓願、宗門聖日、宗派・都道府県

仏・団体役員住所録、忌日早見表、各県宗教法人

事務主管部局一覽その他

定価 二五〇円（送料実費）

出来日 十一月初旬

申込先 東京都台東区西淺草一

五―五（〒一―）

全日本仏教会総務局

事務総局録事（十月）

二日 局内会議

四日 関西事務局との打合

九日 税制特別委員会

十一日 日宗連理事會

十五日 局内会議

十七日 全日仏青と打合（大阪）

十八日 全日仏婦第二十回記念大会に出

席

二十二日 黄檗宗万福寺管長晋山式

二十六日 局内会議

二十八日 三重県仏教徒大会（鈴鹿）に

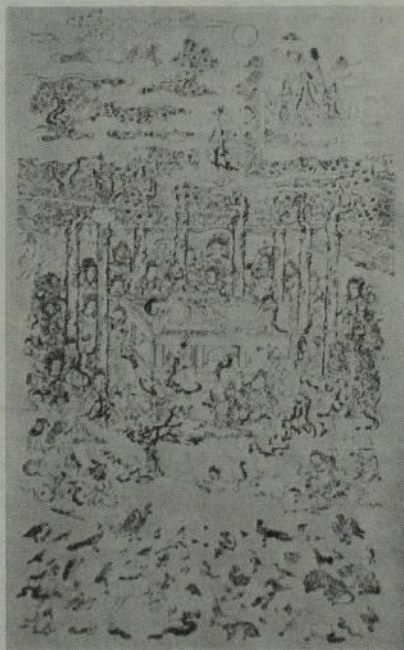
出席 税制特別委員会

発行人 麻布照海 発行所 財団法人
編集人 柳了堅

涅槃図を頒布

48年11月25日から頒布

故鈴木大拙博士ご奉安の涅槃像（江戸中期の木版から摺ったもの）の美術複製



頒布価格 1幅 15,000円（解説付 荷送共）

寸法 ねはん図 60cm×105cm
仮表装出来上り 82cm×170cm

ここにお頒ちする涅槃図は、財団法人松ケ岡文庫所蔵の板木によって摺ったものを、上質の鳥ノ子紙に原寸大でオフセット印刷し、仮表装したものです。この文庫は故鈴木大拙先生の創立にかかり、この板木は先生の多数の蔵書と共に御存命中に寄進されたものの一つです。

板木は江戸中期頃のものとして推定され、紀州辺りにあったものを求められたように承っております。これだけ大きい板木を摺ることは今日では不可能に近いので、今回、松ケ岡文庫のご好意により三百幅だけ限定頒布することになりました。

ブティスト社

〒104 東京都中央区湊二ノ十二ノ十五 一世館ビル
株式会社
電話（〇三）五五一一〇〇九四・〇〇九五
振替 東京 一七一三一一九番

宗教界が
待望の書
カラ
イン
の
仏
蹟
第一集 六集 一組 九百円
池上大会採用

カラ
イン
の
仏
蹟
池上大会採用

全日本仏教会
東京都台東区西淺草一ノ五ノ五（東京本願寺内）
電話（〇三）八四三三・六三三四・一〇〇三